

九州という思想

石川, 巧
九州大学

川口, 隆行
台湾東海大学

崎山, 多美
作家

土屋, 忍
武蔵野大学

他

<https://doi.org/10.15017/8494>

出版情報 : 九大日文. 6, pp.87-123, 2005-06-01. 九州大学日本語学会「九大日文」編集委員会
バージョン :
権利関係 :

《シンポジウム》

九州という思想

「九州という思想は存在するか、
地名で括ることの問題をめぐって。」

(パネリスト)

ISHIKAWA Takami

石川 巧 (司会)

KAWAGUCHI Takeyuki

川口 隆行

SAKIYAMA Tamii

崎山 多美

TSUCHIYA Shinobu

土屋 忍

HATANAKA Yoshie

畑中 佳恵

バーナビー ブレーデン

Barnaby Breaden

時 二〇〇五年三月二十五日

場所 九州大学六本松キャンパス第一会議室

石川 これよりシンポジウムをはじめさせて頂きます。私は本日の司会進行を担当致します、九州大学の石川巧です。よろしくお願い致します。

本日は四人のパネリストのみなさんにお越し頂いておりますので、最初に、それぞれのご発表を頂き、その後、作家・

崎山多美さんに今日の問題に引きつけたお話をして頂いたうえで、自由討議に移りたいと思います。

まず、シンポジウムの趣旨について説明させて頂きます。九州大学では、大学院比較社会文化研究院の教員による学内共同研究プロジェクト(通称P&P)「九

州という思想」を三年間の予定で立ち上げており、このシンポジウムもその一環として企画されています。

いま日本の各大学では中国、韓国を中心とした東アジア地域との連携や東アジアそのものの研究が盛んに行われていますが、「九州という思想」というタイト

ルの背景にあるのは、この「東アジア」という概念と向き合うものとして「九州」を再構築していこうという考え方です。

これは考えようによっては時流に乗り遅れまいとする安直なテーマでありまして、いまさら「九州」という枠組みを強化してどうするんだと批判されても仕方がないところがあります。また、果たしてそんなものが存在するのか……という反論もありうるでしょう。逆に、「九州」の風土や特性というものを自明のものとしていてる方たちにとつては、「九州」の「九州」らしさをもっとアピールしたらいいという言い分があるかもしれませ

ん。
そうした様々な意見や考え方があることを承知のうえで、私たちはこれまで三回にわたって、サークル運動、水俣学、「沖繩」問題についてシンポジウムを重ね、本日の企画にたどり着きました。

本日のテーマには、「九州という思想は存在するか」というメインタイトルの他に、「地名で括ることの問題をめぐって」というサブ・タイトルがついていま

す。地名で括ることの問題が、なぜここに出てきたかといいますと、昨年急逝された花田俊典氏（九州大学教授・日本近代文学）が、事あるごとに、人間を土地の名で括っていく言説のあり方に不満を抱いておられまして、いつか、それを文学の問題として議論したいとおっしゃっていたわけです。残念ながら花田氏の構想は実現されませんでした。せめてそれをテーマとした企画を立ち上げて、花田氏の問題編成に少しでも迫ってみたいと考えました。また、花田氏は具体的に、教え子であるバーナビー・ブレーデン氏と畑中佳恵氏の研究を想定して企画を考えていましたから、その二人にはぜひ発表をお願いしたいと思っていました。

幸い、お二人には快くお引き受け頂き、この問題編成に賛同してくださる方を外部からもお呼びしようということになったわけですが、花田氏が亡くなつたあと、「九大日文」第五号に収録した著作目録や略年譜を作成していくなかで、花田さんの地名に対する拘りは、作家・崎山多美氏のエッセーや小説を読み、それに応

答するための批評を書くなかで培われたものだとということがわかりました。いくつかの論考を読むなかで、地名で人を括ることに対する花田氏の認識は、崎山さんの言葉とシンクロしたところに生まれているということがわかったのです。

残された課題は、こうした花田氏の発案を、より挑発的に引き受けてくださり、面白い議論を展開してくれる方を探すことだったんですが、様々な論文や著作に目を通したうえで、台湾から東海大学の川口隆行氏と武蔵野大学の土屋忍氏にその役目をお願いいたしました。川口氏は大江健三郎や原爆文学に関する研究を通して「ヒロシマ」を語ることの諸問題を探究されています。土屋氏は、南島の徴用作家の問題、南進論などを多角的に研究されている方です。

このシンポジウムは二十代から三十代の、非常に若い世代の研究者を中心とした集まりになりましたが、別に若いから呼んだわけではなく、地名という問題で何かを考えようという発想自体が新しい学問の在り方を示しており、それに応え

ることのできる方が結果的にこのメンバーだったということです。

ここで、私自身のもくろみを少しお話しさせて頂きます。私がこの企画について考えているのは、九州という枠組みで文化の形態を考えること自体がそもそも可能なのか、ということです。そういう複雑な括り方で人間を規定し、内と外を線引きするという思考の在り方は、地名だけでなく、固有名の問題であったり、肩書きの問題であったり、その人間を名付けていく様々な思考の在り方とつながっているわけですから、この企画も、そこに接続させていけるのではないかと思っています。

それから、特に地域とか土地の名前が持っている人間を拘束する力。この力学がどこから派生してくるのかという問題もあると思います。私たちはそれを都合良く使い分けています。ある場面ではそんなものは意味がないといって拒否しつつ、その一方では、共同体への帰属意識を高めるために、地名や土地の記憶にもとづいた物語を積極的に語ります。あた

かもそこに由緒正しき何かがあるかのように自己演技してしまうのです。それは私たちの中にある一種の甘えだと思えますけど、そういう甘えと、都合良く使い分ける発想の在り方のようなものを、文学の問題として問いかけてみたいというのがあります。

それからもうひとつ。それは、このプロジェクトの最終的な狙いでもありますが、文学研究をテキストの世界に閉塞させず、広く人文科学や社会科学の領域と交通しうる学問として位置づけていくためのきっかけとして、地名で人間を括ることの問題を再編成したいと思っています。そのことでパネリストのみなさんご発表を縛るつもりは毛頭ありませんが、とりあえず、大きな野望としてはそういうことを考えているわけです。

では、さっそく、川口さんからご発表をお願い致します。

川口 川口です。今日の私の話のタイトルは、「九州という思想は批判的なのだろうかを生み出せるか」というもので、話

題を三つ用意しました。三つの話題をうまくつなげながら、時間内にタイトルに掲げた問題に辿りつけたらいいなあと考えております。

まず一点目は、原爆ということです。

原爆と文学をめぐってここ数年来ずっと考えているのですが、栗原貞子さんの「ヒロシマというとき」という詩がありまして、すでに自分の考えを話したり、文章にしたりしましたが、先日栗原さんが亡くなられたということもあり、これを再考してみようと思います。ちょうど「ヒロシマというとき」という詩のことを私が考えていたのと同じ時期に、岡真理さんがお話をされ活字にされたものがあって、それがいまちよつとひつかかっています（『EDGE』第13号、二〇〇四年七月掲載）。岡さんは、沖縄の宜野湾市にある佐喜真美術館の「シャヒード100の命展」のシンポジウムで、最初に栗原さんのこの詩を朗読されて、「ヒロシマ」というとき／（ああ ヒロシマ）と／やさしくこたえてくれるだろうか」という箇所を、「パレスチナというとき／ああパレスチ

ナと／やさしくこたえてくれるだろうか」というふうには、パレスチナの問題に一気にこの詩を引きつけながら読んでいったわけです。新城郁夫さんが一緒にセッションに出られたそうなんです、何かが乗り移ったかのようにこの詩を朗読されてパレスチナの問題を論じられていたとのことでした。岡さんのポイントはこの「ヒロシマというとき」は、広島の出発点が日本人の極めてエスノセントリックでナシヨナルな物語に回収されているなかで、それを相対化してゆく、批判していく詩なんだということです。批判した先にどこに行くかという、他者と出合い普遍へと開かれてゆく回路を、この栗原さんの詩は提示しようとしているのだと評価しています。

実は私もそれは全くそうだと思つていません。ですが、全くそうだと思いつつも栗原さんの詩をみてやはり思うことがある。「ヒロシマ」というとき／（ああヒロシマ）と／やさしくこたえてくれるだろうか／わたしたちは／わたしたちの汚れた手を／きよめねばならない」とあ

りますが、その時の「わたしたち」とは何なんだろうと思うんです。恐らく栗原さんが想定しているのは、「アジアへの侵略をした日本」とか「日本人」という言葉だと思われませんが、では在日朝鮮人の被爆者はどうなるのか、アメリカ軍の捕虜で被爆した人はどうなるのか、台湾から留学してきた留学生はどうなるのか、と。ヒロシマというのが、いわゆるナシヨナルな所に閉じこめられて、そこにもまく入りきれない人々というのがこの詩の中でうまく表現化されてこない、それは何なんだろうと。勿論いま「日本人」と言いましたけど、その中の一人一人の記憶というものがやはり出てこない。もつと言いますと、この詩、面白いのは、アジアへの加害というものを認識した詩だとかかなり評価されるのですが、まず一行目をみれば、「ヒロシマ」といえば（パール・ハーバー）という言葉があります。その次に南京、マニラが来るのですけれども、パールハーバーという言葉、恐らくこれをもう少しはっきり名指せばアメリカかと思えます。ヒロシ

マという言葉を使ったときに、お前パールハーバーのことを忘れたのか、と言うのは、きつとアメリカという主体が想定されている。ところがこの詩の中ではアメリカという名前は出てこない。アジアの国々とかアジアの人々への加害ということとは出てくるのですが、アメリカが出てこない。これはなぜだろうと、結構悩んだんですけども、アメリカが原爆を落としたことに関して、あれはパールハーバーという不意打ち、卑怯なことをした最終的な結果なんだ、という論法がありますね。つまりアメリカというのは、自由とか民主主義のために戦って、で、日本は侵略をして、その結果原爆を落とされたんだと。そういう、よくアメリカという国を代表する人たちが語るような言説というものに対して、この詩は何ら解答を出し得ていない。むしろ逃げているわけです。その代わりアジアへの加害というふうを持って行く。私は別にアジアの加害について言うのはおかしいと言っているわけではないのですが、この詩の中でアジアが出てくる代わりにアメリカ

力という名前が出て来ないのはなぜだろうと疑問に思うわけです。結局こういうのはなんだらうなと思って考えてゆくと、つまり「東アジア」という、戦後或る種の地域としてのまとまりが産み出されてゆく。アメリカにおける地域研究とか、軍事経済戦略の問題から言っても、東アジアというまとまり自体、アメリカのヘゲモニーによる主導において形成された括り方だろうと思います。とするならば、この栗原さんの詩そのものが、アメリカのヘゲモニーによる東アジアという地域の再編成の過程というものを反復しているような気がします。この前今日の資料を作っていてハッと気が付いたのですが、「ヒロシマというとき」は一九七二年の詩なんです。七二年とは、沖縄が再び日本に編入されて、日本と台湾が断交して、日中が国交正常化してゆく。その後には、やはりアメリカの戦略転換と連動するような地域編成というのがありまして、その中でこういう詩が出されてゆく。

ポイントとして言えば、地名とか、

記憶というものが一体誰のものなのかということ。恐らく、広島という特定の地域でおきた出来事とか、或る個人の記憶といった個人的なものを他者へつなげてゆく回路が必要なのですが、或る種の普遍とかつながりを求めて行こうとする過程にも、いくつもの分断とか隠蔽とか、つながりそのものを不可能にしてしまう装置がある。実は私は、栗原さんの普遍への志向、栗原さんの詩にそうした可能性を読み込み「ヒロシマ」から「パレスチナ」へ向かおうとする岡さんの試みに対して、共感というものを棄てきれない部分をもっています。ただ、私の中では、或る領域化された記憶をどこかにつなげてゆこうとする過程を尊重しながら、でもその中にいくつもの罣が嵌っている、それを丁寧に見てゆこうというのが最近の関心であります。

岡さんは先ほどのシンポジウムでイスラエルの話と日本の話をする中で、アジア大陸の東と西にある国家というものがネーションの、固有なものとしての我を有化する語りというものを出して来てい

るという指摘をされています。そのことと関連して、先日、朝日新聞の記事で面白いものを見つけました。イスラエルのエルサレムにありますヤドパシエムというホロコーストの記念館の新館設立に際して、今まで歴史の記録重視だった運営方法を変えて、語り部、証言者の役割を持たせるような展示内容に変更してゆく動きがある。展示内容自体も、デジタル化された語り部の証言があつて、館内に入つてゆくと、バーチャルなホロコーストの体験ができる、そういうふうな記念館にしてゆこうとしている。その時に出てくる問題ははっきりしていて、イスラエルのシャロン首相がその記念館の開館式で講演し、イスラエルの存在は、ユダヤ人が再びホロコーストを経験せずに済むことの唯一の保証だと言つわけです。記念館はそのためにあると。また、世界ユダヤ人会議の議長さんが、ヤドパシエムがホロコーストを語る最も権威ある地位を占め続けなければならないと言う。つまりホロコーストを語る権威、語る権利は、ユダヤにある、イスラエルにある、

それが語り部重視とか、体験の継承という新記念館の底流にある。実は同じようなことが今広島で行われていて、広島島の被爆者の方がお亡くなりになってゆく、そこで被爆体験の継承ということが叫ばれてゆくわけですけども、今の広島の平和記念館が三年くらい前から改装を計画していて、展示内容を変えようとしている。三年がかりで今年結論が出るのですが、その方針というのが、被爆体験をより追体験できるように展示内容にしてゆくということらしい。今の広島の記念館は九〇年代に改装がありまして、入るとすぐに、世界史のなかでの広島的位置、軍都「広島」の歴史、そして被爆、そういう展示になっている。さらに歩いてゆくと、昔ながらの蠟人形の被爆の状況のジオラマがある。九〇年代にいわゆる被害の問題が出たときにはそういう展示がされてゆく。今またそれを変えて、いきなり入ったら、一九四五年八月六日の状況がばあっとあつて、みんながそれを追体験してゆく。そういうふうな展示内容にしようとする方向性になっているそう

です。これを一概に批判するつもりは全然ないのですが、そういう何かを追体験しようとする段階において、どうも何か最近内向きの傾向が出ていっているのではないかと思う。一つ面白い例があります。最近出たこの史代さんの『夕風の街桜の国』という、かなり売れているマンガで、十年に一篇の傑作と言われている作品ですが、確かになかなか書き込んであり毒もあつて好いなと思うのですが、台湾の学生と一緒に読んでゆくと、或る学生がどうしてもつまづいてしまう言葉があると言うのですね。それは、一番最初に掲げられた言葉で、「広島のある日本のあるこの世界を愛する全ての人たちへ」という言葉なのですが、こりゃいつたいなんなんですか先生と聞くのですね。私は分かりませんというほかないのですが、広島と日本と世界、というのがすうっーとつながっていつてしまう。そこには他者がいないし、広島を愛さなかつたら世界にいられないの、とかいう感じで、学生がどうもこの言葉について悩んでいたんです。一体この言葉は何のた

めに必要だったんですかと。広島を経験を世界へつなげてゆこうというのは分かるんですけど、何かこういう、雰囲気的にどうか情緒的に、なんとなくすつつと拡大してゆく語り方というのが実はまた最近あるのではないかと思つていま

す。そんなことを考えながら今台湾で仕事をしていますけど、二点目として、私が台中市の大学で行っている研究とか教育というのを、大局的に学生の一人一人の気持ちなど考えずにかなり乱暴に大雑把にまとめて言えば、結局のところ、学生が日本語を学び、日本を知ることを通して、日本と同一化することを促進しているのではないかと。つまり学生に、日本に認められたい、日本に留学したい、日本語が上手になって日本人の友達を作りたい、要は二ツポンに認められたいという欲望を日々喚起しながら、学習意欲をそそって、身体化させてゆくのだらうなど。二等国民、二級帝民生産装置としての、日本語教育、日本研究ということをやっている。実はこれを全く内面化

しているのが台湾人の先生達なんですね。つまり日本に留学して、日本語や日本の研究をして、日本で学位を取って戻ってくる。そのときに、日本に認められた私、という認識がかなり強固に作られている。勿論それは日本人の教師も似たようなところがあった——海外に出て自分自身がやっている役割というの、良くも悪くも「日本」を普及するということを日々やっている。

あるいはまた、「日本」を媒介にして、「台湾」を立ち上げようとする手助けをしているのかなど。これは「日本」に向かうとは何か逆方向に見えますけど、台湾ナショナリズムというのがある、台湾という地域、国家を立ち上げるときに、いま日本がどうしても必要になってくる。それは歴史的に見ても、中国大陸との切断ということを考えたとときに、日本植民地期というものが、良くも悪くもそこが大陸と自分たちを切断してゆく、歴史的なポイントなんだと。例えば、本当はポストコロナアル的な問題意識から始まっていたはずの植民地研究が、植民

地期を議論するという行為において——否定する肯定するに関わらず——今それは台湾という地域を立ち上げてゆくのとは抜き差しならぬ関係にある。そのとき、「日本植民地期研究」ですから、日本時代とか日本というものがどうしてもそこに浮上してしまう。私は台湾という地域ないしは国家を立ち上げることが全くいけないこととは思いません。ただし、それが日本という項を一方におくようにしてなされるとき、どのような事態が生じるのか、考える必要を思うのです。それは逆のことを考えるとわかりやすいのでして、二一世紀前半における日本の地域的なヘゲモニー、つまり東アジアの中で仲良しでやってゆけるという幻想を抱けそうな地域が台湾だとすれば、その台湾という地域を立ち上げることが日本の国益にとっても必要なんだとしたら、日本語を勉強して「日本」化すること、日本語を勉強して「台湾」化することとは、いまのところ実は全然矛盾してなくて全くの共犯関係です。森宣雄さんが言うところの「台湾／日本—連鎖するコ

ロニアリズム」といった事態です。

そんな中で日々やっているのですが、では自分はどうしたらいいのかなとつらつら思うのですがよく分かりません。よく分からないながらも二つの方向があるのかなと思っています。一つは日本語という他者の言語を彼らが学ぶことを手助けしながら——それは同時に私自身も言語を学ぶ行為でもあるのですけど、そうしたことを内在的に批判・解体する作業、つまり日本語を勉強しつつそれをも一度解体してゆく。かなり難しい作業しかしむしろ伝統的なやり方なのかもしれません。もう一つ最近思っているのは、日本語習得という究極の目標を止めようということですが、これは日本語文学科という所においては殆どアイデンティティを解体することなのですが、日本語がうまくなるという最終的な目標を、目標から下ろしてしまえと。もちろん日本語を勉強するということでは全然ないのですが、それを唯一の究極目標にするということをやめてしまつて、「とりあえず手にした」日本語を——学生はいろんな

日本語を話し、書きます、或る意味ぐちやくちやです——そのぐちやくちやな日本語を使いながら、何か「日本」と「台湾」の往復運動のようなものとは異なる回路を作れないのかなと。これは同僚が中心になって構想しているのですが、日本語を勉強しているアジアの学生と一緒に何か問題を考えてみる会議をしてみようとか、そういうことも考えています。「日本」に盲目的に向かうのではなくて、さりとして「台湾」に留まるだけでもなくて、とりあえずの日本語を使いながら別の回路ができないかなということを思っております。

最後に、三点目ですが、石川さんの新聞記事を見ての、ちよつと意地悪な感想です。石川さんは、「九州という思想」を「構成」しつつ「解体」するという言葉方をしていますが、果たしてそれだけいいのだろうか。勿論このプロジェクトに関わっている人たちがそんなに単純じゃないということは重々承知しているんですが、石川さんの新聞記事の中に「積み木遊びのような仕掛けの中で」という

言葉があるのですが、僕はどうもひっつかつたんですよね。積み木遊びって楽しいんですよ。子供とよくやるんですが、積んで崩して積んで崩してという、殆ど自己充足しているあの遊びはとつても楽しい。賽の河原の石積みも結局快樂なんじゃないかなと思うくらいです。快樂を否定してはならないと思うのですが、でも積み木遊びの作業は結局、それ自体が目的化し、閉塞してゆくのではないかという恐れもあります。グローバリズムとローカリズムの接続という言葉を石川さんは使っておられましたが、癒着とか共犯関係という言葉で言ってもいいと思うんですけど、それを本当に断ち切れるだろうかかなと。「九州という思想」というプロジェクトは、貪欲なグローバリズム、最近、ぼつたくり資本主義という言葉を使っているのですが、それに呑み込まれてゆかないだろうかかなと。

そもそも石川さんも書かれているように、アカデミックなレベルでは、独立行政法人化、特色ある大学運営とか、国際競争力の話とかがあつて、それに政治

行政レベルでは地方分権、道州制の論議というものがあつて、それはどこかでグローバリゼーション、新自由主義の流れと連動している。今回の「九州という思想」という九州大学の特色を打ち出そうというプロジェクトについても、道州制の論議において九州というものを立ち上げてゆくときにうまくアイデンティティを作るものとして使われてしまうのではないか。現在進行しているようなかたちでの地方分権とか自己責任という議論が、結局はさらなる周縁化というか、地方でも自己責任でやれない地域は切り捨ててしまえという話になっていったときに、切り捨てられる所がどんどん出てきて、でも、多くのひとは切り捨てられないから、さらに競争し、だけど競争すればするほど不安になる。そうした不安をすくいあげるものとして、日本というナショナルリティはますます強化されてゆくのだと思います。

それに「九州という思想」ということでやるというばいネタは出てくると思うんです。批判的にやるにしてもいろいろ

な事象が出てくる。そうした歴史のアーカイブ、蓄積というものがあって、そこから物語を生成してさらに解体する可能性を見ているんだろうなと思うのですが、ところが、これは先ほどの積み木崩し話と関係するのですが、ほとんどオタクの領域と見まがうアーカイブ集めと皮相な二ヒリズムとが結託する可能性がないだろうか。八〇年代のニューアカデミズムとか、九〇年代の文化研究も、結局はそういう所に陥ってしまっ、資本に回収されてゆくという事態があつたよくな気がするのですが、それに「九州という思想」というプロジェクトは嵌ってしまわないだろうかと思つたのです。

結論というより、これは僕自身分らないので、みなさんに投げ返しながらかえたいということなのですが、さっきの原爆の話もそうだし台湾の話もそうですが、批判的な政治的連携、政治的連携という強いかもしれないが、分断を越えながら誰かとながつてゆくことができるのだろうか。国家に回収されないよくな、米山リサさんの言葉を借りれば「ポ

ストナショナルな公共性」、つまりいま公共性の領域がどんどん閉じこめられて狭くなつていっていると思うのですが、そういう公共性を作り出すような地域研究が可能なのか、ということ。そもそも可能かどうかということ自体を問い返すような実践として、「九州という思想」が存在しえるのか。そういうことを考えています。つまり私の最近の関心は、分断を乗り越えて——いや分断されつつ、の方がいいですね——分断されつつ、でも、誰かとながつてゆくことができるのかという点にあります。

石川 有難うございました。厳しいご指摘も頂きましたが、応答の方はまた後ほど。続いて、土屋さんをお願い致します。

土屋 土屋です。よろしくお願い致します。石川先生の方から「地名で人間を括る考え方がいかに当人たちの意識を拘束するか、なぜ私達はそうやって地名で人間を括るような思考をしてしまうのか」という問題を提起したいというメールを

頂いて、ほぼそれに沿って私なりに今日まで考えてきました。「九州という思想」ということについては、私は分からない、といいますか——ちよつと言葉を選びますね、よそ者と言おうとしたんですけど——あまり九州という単位で何かを考えたことはそれほど多くは無かつたので、九州ということ素材にしては考えられないのですが、ただ「九州という思想」と言われてふつと思つたのはアフリカのことですね。アフリカも九州も、一つの地続きの、一つの大陸のようなものを、十把一からげに外から呼んでいる呼称です。七〇年代以降、文学の方でアジア・アフリカ作家会議などがありましたし、経済学・社会学の方で、南北問題の見地から、アフリカに目を向けるということが非常に流行したことがあります。

アフリカをオルタナティブな第三世界を代表する場所と見なして、そこを通じて何かを考えるということが今でも無いわけではないし、七〇年代・八〇年代を通してあった。南北問題で言うと、川田侃さん、西川潤さん、鶴見和子さんたち

が、アフリカから独立国がたくさん出た時代の後で、まさにポストコロニアルですけれど、ひたすら、アジア・アフリカに注目するということをやる。宗教学者の田川健三さんまでがアフリカ体験を通してアフリカを語ったりということがあった。吉本隆明もアフリカに注目する。しかしそれに対して地域研究者、文化人類学者たちから、なぜアフリカを一つにするのか、あれだけ多様な世界をなぜ一つにできるのかという反論はもちろん出ていたわけです。そういう意味で、アフリカという括りを日本人の思想家たちはしてきたわけですが、同様に一種の〈大陸〉としてイメージされる九州という括りもそれに近いものがあるのかなということを一つ考えました。ただし地名で人間を括る考え方、それは勿論その人間を、当人たちを縛ってゆくわけですが、私としては、必ずしもそれが全て悪いことじゃない、功罪の罪の方が大きいとも言えるわけですけども、必ずしも罪だけではないだろうということを考えます。

ではどういふ功があるんだろうかとい

うことなんです。例えば最近木村一信さんという立命館大学の先生が、世界思想社から『昭和作家の〈南洋行〉』という本を出されました。それに先行する『もうひとつの文学史』（増進会出版社）において彼は、個人的な経験、体験に触れつつ、なぜこういう研究をしているのか、文学作品を通じて日本の南方関与、日本と東南アジアについて考えるという研究を、なぜしているのかということに触れた箇所があります。インドネシアに滞在していたときの話です。海外で日本人が一人で食事をしたりお酒を飲んだりしているときには、当然その土地の人、あるいはその土地にきている人、あるいはその土地にいる様々な国の人と交渉するきっかけがあるわけです。木村さんがインドネシア人の友人とビールを飲んでいるときに話しかけてくる人があって、その人とカタコトのインドネシア語を通じてお話しをしていたところ、自分が日本人であるということが分かった途端に相手席を立ってしまった。その相手はオランダ人だった。そういう経験があったと

書かれています。と同時に、川村湊さんも、非常に早い段階で、今のよう韓国ブームが無かった時代に、釜山に行つて日本語の先生をしていたのですが、そのときに、ある酒席で突然殴られた経験について書いています。恐らく木村一信さんにしても川村湊さんにしても、そういう経験は、一つの、それ以降研究を持続する大きなきっかけとなつていったと思います。つまり、海外で、自分は勿論好きで行つてその土地でいろいろ勉強していたわけですが、日本人であるということを引き受けざるを得ないような経験として、その経験が残るわけです。つまり、ここでは地名ということ、——国名、日本というのも一つの地名だと思つたので、国名、国籍のことを私は話そうと思つたのですが——日本が好きか嫌いかは別に、もしかしたら嫌いかもしれないし、自分は日本人であると自信満々で海外に行つているとは限らないわけですが、そうであるにもかかわらず自分の国籍というものを背負わされることがある。そのときには当然、特にアジアの場

合には、自分が知らない先祖達、といひますか、日本がしてきた負の遺産というものを個人的に引き受けざるを得ない。そういうことがある。これは個人的にです。それから、引き受けようが引き受けまいがいいのですが、そこで敢えて引き受けるという行為ですね。このことは一つ、もしかしたら大事なことなのではないのか。といひますのも、実は川村さんや木村さんの例を挙げたのは分かり易いからであつて、かなり多くの人が似たような経験をしていますし、別に特別な事例ではない。私自身にも経験があります。私は、南北問題を考えるゼミで勉強をしていたことがありまして、西川潤先生だつたんですが、海外合宿で東南アジアに行きました。そこで西川先生が、その国に入つた時点で、君たちは南北問題といひわば差別的な構造に——経済的な不均衡に限らず様々な不均衡があるわけですが——既に巻き込まれているんだ、足を踏み入れた時点で既に関係しているんだよといふことを言われたんですね。そのことの意味の大きさに、後に本当の意味

で気が付くわけですけど。ですから、いろんな経緯があると思ひます。しかしその移動するということ、そしてグローバルゼーションというものの中に、地名意識、国名意識、国籍意識というものがやむを得ず立ち上がつてしまふ。そしてその次が問題になるのかもしれないが、まずは引き受けるということ、そういう意味での日本というもの、あるいは日本人ということ、私は否定しないでいた。ですから、個人レベルで、共同体レベルの記憶や様々な偏見や先入観を含むイメージというものを、やはりどこかで一度は引き受けてゆくということですよ。それが全部くだらないことだと言つてしまふと非常に楽なんですけど、しかしそれはやはり、「歴史認識」なんていう言葉を出さなくても、引き受けるということとで様々な負の遺産や過去の戦争の記憶を考へていけるのではないかと。非常に単純なんですけどそういうことを考へています。

そして、移動ということ、個人的な移動ということの意味についてもあわせて考へたい。今の時代では特に、海外旅行や、海外赴任や、様々な形で国外に出ることが、特別ではないと言つていい時代になりましたので——こういう言い方をするとやはり海外に行けるのは特権的な立場なんじゃないかという声もまだあるかもしれないが——しかし移動という経験、移動という契機が、一つの重要なものとして、地名を考へるときに出てくるのかなと思つています。で、海外に出る場合にはパスポートやビザの取得があつて、ナショナルイデーの規定というものがあつて、法務省の出入国管理局などとの交渉があつて、そういった手続きを経て行くことになる。そのときに否応なく国籍や国境の存在を意識することになる。所与のものとしての国名、地名というものがあつて、移動する体験、その地に行つて、その地で出会つた人々とのコミュニケーションの中で出てくるもの——そこでは地名が自分を拘束するわけですけど——それを引き受けていくことの重要性というものも一方である。そしてそこまで言うのは、要するに日本

の中でも私たちはことさら移動しなくても似たようなことをしているからですね。まあ非常に簡単な例を挙げれば、「在日朝鮮人」のことを「チョーセン」や「在日」と呼ぶとかですね。「在日外国人」というような括り自体が、「日本」への意識・無意識とそのことの裏返しとして地名で人を拘束していることを示しているのかもしれないし。だから自分が、海外に行っている人たに目と会うとですね、日本に来ている人たちのこと、外から来ている人たちのこともまた、分かってくるのかなと。あるいは国境を越える存在に目を向けるとですね、地名につきまといがちな限定的思考——地理的範囲がそのまま思考の範囲・対象になつてしまう傾向を相対化してくれるわけです。例えば「ジャパゆきさん」という言葉、これは造語ですけれども、「ジャパゆきさん」は勿論「からゆきさん」という言葉があつたから「ジャパゆきさん」という言葉が生まれたわけで、「ジャパゆきさん」という言葉は、今はもしかしたら死語かもしれませんが、そういう言葉が

山谷哲夫さんという方が名付けてひろがつたわけですが、それも賛否両論あります。が、「ジャパゆきさん」という言葉があることによつて、作られることによつて、からゆきさんという過去の記憶が想起されると見ることもできるわけで、私はたえずいろんな形で名付ける、地名にしてる国名にしてる、既存のものにとらわれずにどんどん作つてゆけばいいのかなと思つています。例えば、島尾敏雄の「ヤポネシア」、金城一紀の「コリアン・ジャパニーズ」などに見られるように、様々な形で積極的に言葉をたくさん作つてゆくこともあつていいのかなと。その際に曖昧であることはむしろ重要になるでしょう。

いま、グローバル化のなかで、生成する地名意識、国名意識ということ、移動がもたらす変容の意識としての地名というところをお話ししたわけですが、もう一つ、敢えて図式的に整理すると、ローカリゼーションの中の地名という問題もまたあると思います。それは移動ではなく土着と定住の中で生成されるものだ

と思うんですけど、少し別の角度から見ると「郷土」という言葉、先ほどのグローバル化の中で生成する地名意識というものが、異郷の中で生成される、立ち上がるものだとするならば、郷土と呼ばれる場所で生成する地名意識、あるいは地名の拘束というものも考えられると思います。基本的には生まれた場所にそのまま居るのが普通であるという了解事項がやはりどこかにあると思われ、義務教育のなかでは様々な郷土に根ざした教育というのが行われる。明治以降に成立した様々な行政域が、所与の郷土として事後的に地理や歴史が調べられて、地理教育や歴史教育を通じて郷土意識が、教育の現場で要請された経緯があるということはいろんな研究の中で分かることです。歌人・島木赤彦が長野県でおこなつた教育活動にみるように、「村勢調査」があり、「郷土誌」がまとめられ、「地理歴史唱歌」というものが制作されて、それが教育に導入される。愛国心の基点となるべき愛郷心を涵養する手段として郷土誌を確立して、それが地理教育に導入

されてゆくということがあった。愛郷心を通じてその愛郷心の上位にある愛国心につなげてゆくという、そういう役割を郷土教育が果たした。それは様々な歴史学などの研究成果として出ていることです。郷土教育を通じて生み出されるのは、

「私」というよりは「私たち」であり、「我々」であり、そういう共同体の意識が生成されて、それが上位の国民へと接続されるという、非常に図式的で分かり易い説明ができるわけです。ですからその場所によらずと居て、土着と定住が前提になる場合には、その場所における過去を共有し記憶も共同化して、或る閉域的な空間を共有して、「私たち」というものを作って、共同体意識というものが予定されてゆく。そしてそこに文学というものも、文学者も様々な形で関与しているわけですが、こう説明していて分るように、今日まで続いていることです。戦時下に限らず現在でも様々な地理科目・歴史科目の中に郷土誌・郷土史が導入されて自分の地元詳しくなるうというのは、教育の現場で行われていること

です。ですから九州という思想というものを立ち上げたときには、我々の郷土としての九州、そういう「我々」というものが生成されてゆくことにはなるのかなと思います。

文学者は、最初に言った、グローバルゼーションの中の地名というものに、様々な海外の紀行文を書いたりいろんなポルターージュを書いたりする中で関わっていると云えますし、特に文学館や文学碑に携わる文学研究者は、ローカリゼーションの中で人を地名に囲い込む作業に関わっていると云えます。すなわち、文学館や文学碑を建設して、郷土という共同体を実体化、活性化することを通じて、郷土と呼ばれる場所で生成する地名の拘束性を強化していると思います。様々な文学館はその上に、その土地の名前がつけられることが多いと思います。固有名詞を出していいのかわかりませんが、亀井秀雄さんという人がかつて日本近代文学会の例会だったと思いますが、文学館批判をしたんですね。これは今回のこのプロジェクトとかなり主旨が近い

ご発表だったと思いますが、土地と思想、土地と文学を結びつける考え方に對して非常に批判的に、功罪の罪の方を取り上げて文学館批判をして、それは「日本近代文学」に「言説空間論再考」という形で載ったんですが、様々な形で言説上の抑圧と文学館の建設が関わっているということも、様々な角度からお話しされたわけです。しかしその後、亀井さんは小樽文学館の館長になられてしまったので（笑）、どうされるのかなと思つたんですが、それはそのままになっているということ。文学研究者であるならば文学館と関わっていかざるをえないところもまたある。もちろん私はそれが全部悪いことだと思つているわけではありませんが、それらを亀井さん流に理論的に考えていくなら、「文学館の犯罪性」なるものが浮上してくることもあるでしょう。だからと言ってそのような研究者が、自らの理論的立場を守って文学館批判を貫けるわけでもないのです。

それで、様々な形で地名で人間を括る考え方というものがあるって、人間の意

識を、私達の意識を拘束しているわけですが、それに対してはどうすればいいのかと。なぜそういう考え方をしているのか、という答えはわりと簡単に出来るわけです。つまり、便利だからというのが非常に大きいでしょうし、あるいは行政レベルで考えたときには、戸籍制度から始まって、人間を管理するために地名で言ったり区域がある方が都合がよいわけです。ですからそれをなくせというのは非常に難しいので、所与のものとしてあるのは確かです。では意識のレベルでどうするのかという話になってくる。私としては、それが可能であれば、常に移動の主体となること、そうしたことによって何らかの活路が、個人の意識のレベルでは何らかの活路が見えてくる可能性もあるのかなと思っていますし、それと同時に、個人個人が例外的存在として、異邦人としてどこかに土着することも同時に大事だと思えます。非常に個人レベルで考えてゆくとその二つが出て来るのかなと、私は現時点では考えています。ですから一応事例を大きく分けて二つ挙

げて、個人的にはどう振る舞ってあげたいんだらうかということをお考えのうえで、そういう形でご報告させて頂きました。

石川 はい有難うございました。三人目はバーナビーさん、お願いします。

バーナビー バーナビーです。午前中の博士論文審査会では、私の話が身体性に欠けているという指摘がありましたので、今回は身体性を織り込んだ話をしようと思えます。土屋先生からもお話がありました郷土史、郷土研究と結びつくような形で、地理空間の括り方に関連するいくつかの問題点を指摘したいと思えます。

僕自身は、恐らく地球上の殆どの人間と同じように、ふるさとを持っていません。自分の身体が或る地域の土地柄と直接に結びつくということは、僕にとつては非常に考えにくいんです。別の言い方をすれば、自分のルーツはどこにあるかを考えたとき、それは直接或る地域とか、

或る町とか村とかと結びつきません。例えば、母方の家系だけで言うと、ニュージーランド、ナウル島、タスマニア島、デンマーク、イタリヤなど、あちこちに拡がってゆくわけですね。収斂せずに、永遠に拡がってゆく。恐らく世界中の殆どの人間と同じように、この身体は度重なる移動の産物です。移民という形での人間の移動ですね。だから、僕は地域を考えるとときに、どうしても移動を考えてしまうわけです。

ひとつだけ、一応区別しておきたいんですけど、地域とか地名を考えるときには、具体的な法制的な、政治的な実体性をもつ地域と、そういった実体性の薄い地域が考えられると思います。例えば僕の場合、母はタスマニア島の生まれで、僕も一時期住んでいましたが、タスマニア人と名乗るときと、オーストラリア人と名乗るときはやはりニュアンスが違います。(オーストラリア人)というのは、一種の法制的な実体性をもつ表現です。実際、パスポートには「オーストラリア人」と書いてあるので、恐らくそれは否

めない事実です。一方、タスマニア人と名乗るときには、それが島なので、タスマニア島の中に住んでいたという事実を示すだけです。しかしそれは同時に、少し戦略的というか、問題含みの言い方になると思います。「九州」という地域の一つの特徴は、はっきりした境界線を持たないということです。みなさんご存じのように、場合によって九州は七県だったり、八県だったり、九県だったりして、山口、沖繩を含んだり含まなかったりするわけですね。地域の括り方について、政治的・法律的事実性の問題の他に、もう一つは、地学的な構造に於ける機能の問題だと思いますが、この点はしばらく保留しておいて、まずは名乗る行為について少し考えたいと思います。

僕がこのテーマに関して何か付け加えることができるのであれば、それは非常に楽観的な関心なんですけど、つまり先ほど言った、例えばタスマニア人だとか九州人だとかを名乗るときは戦略性、別の言い方をするとその地域のブランド性、付加価値ですね。僕は去年、デンマークに

行ったんですね。そこで、ひいおじいさんのお墓にお参りしてきました。しかし、デンマークの言語も地理も風習も全く分らない自分が、ひいおじいさんの墓の前に立っていても、やっぱりそこに立っている自分がよそのものに他ならないことを痛感しました。親戚のおじおばにとても暖かく迎え入れられて、その案内でデンマーク観光もしましたが、とても里帰りした気分にはなれませんでした。

デンマークに行っただちようど一ヶ月前に、デンマークの王子様が結婚したんです。誰と結婚したかというところ、オーストラリア人です。しかもタスマニア島の人。しかも、そのお姫様になった人が、何度か飲み会で会ったこともある、僕の大学の時代の数学の教授の娘なんですね。なんだか、とても遠い存在になってしまったなあ（笑）。ともかく、デンマークで飲み屋に行くと、カメラを首からぶらさげているせいか、隣のおじいさんに話しかけられて、いやわかんないわかんないと言ったら、今度は英語で話してくれて、どこの人、何してるなどと聞かれます。王

子様の結婚式は、日本ではそれほど大きく報道されなかったと思うんですが、デンマークでは物凄く大きなイベントです。僕が行った当時、二人の新婚生活は雑誌、テレビ、ラジオなどで毎日のように取り上げられていました。ですから、オーストラリアから来たと言ったら、すぐに、そういう話題になるわけですね。向こうはお姫様の同郷人に会ったので大喜びです。そこにタスマニアですと止めを刺すと、ビールまでおごってもらえる

（笑）。要するに、そういう力があって、そういう価値が付くんですね、地名には。そして、そういう使い方をしているのは恐らく僕だけじゃなくて、みなさんも或る程度こういうふうな、地名で得している場合も損している場合もあるでしょうが、ある程度戦略的に使っているのではないのでしょうか。

勿論、実際はそんなに簡単な問題でもなくて、洋服のように、今日はちよつとタスマニア色を着ようとか、九州風で行こうとか、地名に付着するアイデンティティを自由に着替えられるかと言えば、

そんなに簡単にはできないわけですが、つまり、なに人ですとか、どここの人ですと実際に名乗ることが出来るかどうかということは、非常に大きな問題なんですね。簡単に言えば、地域を括って地名をつけて——例えば九州と呼ぶことによつて、その空間（スペース）を一つの場所（プレイス）として、或るアイデンティティすなわち統一性を持つ場所として語ることが可能になります。客体として考えることが出来るようになるわけですね。

それと同時に——あるいはその結果として——その場所に一種の主体性を与えることができるんです。「九州はこれからどうなるか」「九州はどうすればいいのか」「九州はどこへ行く」などといった語り方が可能になります。言い換えれば、その地名に独自の歴史、土地柄や力を想定できるようにするんです。

別の観点から見れば、それは一種のブランド性の可能性です。つまり付加価値ですね。あるいはボードレールの言葉を借りれば、象徴価値がそこに生まれる。例えば僕の大学時代の友達がタスマニア

であわびを取っています。みなさんご存じないかもしれませんが、タスマニアは世界のあわびの四分の一を生産しています。日本で消費されるあわびのかなりの割合がタスマニア産です。一方、牛肉に関しては、以前はオージービーだったのですが、狂牛病の災禍のせいで最近ではタスマニアビーフというブランド名をつけて売っているみたいですね、タスマニア政府当局は。ですがタスマニアビーフは、あわびに比べて市場シェアも少ないし質も良くない。なのに、なぜ「タスマニアあわび」がなくて「タスマニアビーフ」があるのかというと、それはタスマニアというブランドに付くイメージの問題だと思えます。タスマニアビーフと名付けることによつて、実際魅力的な商品になり、象徴価値が生まれます。一方、あわびならば、国産の方がいいという固定観念があつて、従つて国産を名乗った方がよく売れます。あるいはまた、ここ数年観光業では沖縄ブームですけど、ツアーを申し込むときには那覇行きのツアーではなく沖縄行きのツアーなんです

ね。実際には殆ど全て那覇行きのツアーなんです。那覇という地名を使うより沖縄という地名を使った方が商品として魅力的なので、沖縄行きのツアーになります。

九州の場合は「九州経済調査協会」という、戦後まもなく九州大学を中心に出来た組織（財団法人）があるんですが、そこがいろんな出版物、九州経済白書といったものを出していて、例えば去年の九州経済白書は「フードアイランド九州」だということです。つまり、九州で生産された食品に九州というブランド名をつけてみよう、九州産のものとして売ってみよう——簡単にいえばそういう話なんです。九州経済調査協会の出版物では、「九州」というのは、だいたい、九州沖縄を指します。場合によつては九州沖縄山口。それは、地域の経済を調査する上での都合もあると思うんですけど。場合によつては九州七県、あるいは九州八県です。九州経済調査協会が出している月報では、九州を次のように定義しています——「九州は日本列島の南西部に位置

し、九州島と周辺の島々、及び琉球列島からなる。福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄、の八県で構成される九州地域は、行政経済文化の相互依存関係が強く、これに山口県の一部を加えて九州山口経済圏を形成している」

（※注・「九州経済調査月報」増加「図説九州経済」2003 ▼ 2004「財団法人九州経済調査協会、二〇〇三・一〇）。この定義で面白いのは、

地政学に近い括り方ですね。つまり、地域は、別に統一性があるから地域をなしているわけではなく、ここで使用されている言い方を借りるなら、「相互依存関係が強く」、あるいは一つの経済圏を形成しているから、地域をなしているにすぎない。この観点からみれば、九州沖縄地域を括るそもその理由は、それが一つの「圏」として機能しているからです。あくまでも経済の話なんですけれど。

話は飛びますが、九州大学大学院比較社会文化学府という、この組織も、別に統一性があるから組織をなしているのではなく、「相互依存関係」が強いから——そういう建前で、組織をなしているのだ

と思います。要するに「圏」の思想、「ブロック」の思想なわけです。ちなみに、九州経済調査協会は「ブロック」という言葉が大いに使っています。ブロックというのは、一九二〇年代から経済界を中心に多く使われている言葉であり、Pan-American blockとか、日本では東亜

ブロックとか、一九二〇〜三〇年代、大東亜共栄圏思想に発展したような経済圏概念を生んだわけです。こういったブロックは、先程の九州経済調査協会の出版物によれば、北海道、東北、関東、東海、北陸、近畿、中国、四国、九州沖縄、とあるので、それぞれの地域は、国家とは別の次元でブロックをなしていることが分かります。それは、ここでちよつと詳しくお話しする暇がありませんが、こういう、いわば地政学的な括り方は、一種の危険性と同時に可能性も持っているか

と思います。全然纏まらない話で申し訳ないんですが、取り敢えず問題提起という形で、この辺までにしりたいと思います。

石川 予定よりかなり時間が経っており

ますが。休憩は入れずに、四人目の畑中さんにご発表をお願いします。

畑中 畑中です。私はここ数年長崎のことばかり考えていまして、ここに題目として挙げている「長崎」をめぐる語りを自然化している「私たち」とその問題」というのも、長らく頭を占め続けているテーマの一つです。今日はこの「私たち」の中に、この場のなるべく多くのみなさんを取り込むこと、そして、長崎と関わる「私たち」の問題から、「九州」に置くのは誰か？という問いの入り口までたどり着くことが目標です。ゼミ発表のような形になりますが、どうぞよろしくお願いします。

まず最初の話題として、「長崎」と聞いたとき咄嗟に一群のモチーフを想起する「私たち」がいる、ということから確認したいと思います。資料には、その思いつくだろう内容をヒト、モノ、コト別に挙げてみました。（※注・シンポジウムでは資料が配布された。）たとえばヒトだったら、「先賢」と呼ばれるような一群の人

名があると思います。『長崎先賢略伝』とは、長崎開港記念日の関連行事「先賢慰霊祭」のために編集されたものですが、ここには、外国人を含む一〇八名が「長崎」に功績ある人物として括りだされています。このなかでは、グラバーなんかが一番身近に感じられるかもしれませんが、例えば彼のグラバー邸とあたかもゆかりがあったかのように語られるお蝶さんとか、ピエル・ロティのお菊さんといったヒロインたちが思い浮かべられるという傾向もあると思います。あるいは闘争心がなく大らかなお国柄を持っているという、モデルとしての「長崎人」が挙げられるかもしれません。

その次に挙げている「モノ」ですが、まずは土産物の代表格とされるカステラ。そのほか、芥川龍之介が禁教時代のキリシタンに取材して書いた「長崎もの」と呼ばれる一連の小説がありますし、その芥川が愛でたマリア観音も有名です。爆発したマリア像は、それ以上によく知られているかもしれません。また、昭和四三年頃から歌謡曲の世界に「長崎プー

ム」が起きたといいますが、「長崎は今日も雨だった」など当時のヒットソングが幾つか想起されておかしくないでしょうか。さらに、近年、会社更生法の適用を受けたとはいえ、ハウステンボスは、オランダとの親密さという、ある「長崎らしさ」を体現しているものとして意識にのぼるのではないのでしょうか。

「コト」としては、キリシタンの殉教と原爆被災。これは二大悲劇という形で、長崎の代名詞ともいえるべき存在感をもっているでしょう。またその他に、昭和五年から今まで連続と祝われている長崎開港記念日と、その関連行事としての長崎祭というのも挙げています。これについては、改めて取り上げたいと思います。

今羅列したような要素なんですけど、こういう要素を「長崎」という土地の名のもとに反射的に集合させるような「私たち」とは、もちろん、ある限定的な「私たち」でしかないと思います。私自身についていえば、ご近所である福岡に住んで長崎のことばかり追いかけて回しているわけですから、明らかに、ここで言う「私

たち」の中心にいるはずなんです。しかし、例えば九州に関心をもってこの場に集まられた中にも、自分はそうではない——長崎のことは殆ど知らない——という方がいておかしくないと思います。

とはいえ、この「私たち」は、他の土地の名前と関わる場合の「私たち」よりも相対的に広い範囲をカバーしているんじゃないかと思います。なぜかというと、「長崎」という土地の名前は、相対的に強い求心力（イメージを喚起し、かつ拘束する力）を持っているからです。また、同じような力・機能をもつ様々な土地の名前があつて、そのそれぞれと関わり合いつつ生きている人間がいることも想像できます。とすれば、「長崎」と関わる「私たち」の問題が他人事でない光景として引き受けられる場面というのは、少なくともいいのではないかと思います。

そのような「私たち」なんですけど、「長崎」という名前を聞いたとき、それは港のことですか、都市のことですか、それとも市ですか、県ですか、というふうに特に確認しなくとも、「長崎らしい何か」

を思い浮かべることが出来るのではないでしょう。資料に市域や県域がどのよう編成されてきたかを示しています。一口に「市域」「県域」といつても、それがいつの「市域」、いつの「県域」であるかによって大きく異なってくるということが分かるでしょう。でも、「私たち」はたいいてい困らないし、悩みません。「長崎」は、地図上に固定されない、イメージの圏域を指す名前として機能しているからだと思います。そのイメージの傾向についてごく大ざっぱに言えば、南蛮・紅毛趣味的な——唐やロシアの要素まで含んでエキゾチックな、と言うこともできるでしょうが——傾向をもっています。また、南蛮・キリシタンの物語に顕著な悲劇性を、一つの大きな特徴として見るようにです。

さて、二つ目の話題として、様々な文物が「長崎」という名前のもとに括られる特定の意味世界に位置づけられることについて、その豊かさの側面と、貧しさの側面とを並べて考えてみたいと思います。例えば、ガイドブックや旅行記など

の語りの量、記念碑など観光スポットの数の多さはそのまま、豊かさと関わっているように思われます。「長崎」といえばこれこれこういうものだよ、という共通理解が容易に成り立つことも、ある豊かさともみることが出来るでしょう。それは、物量の豊かさ、再生産することの豊かさです。

一方、「長崎」の要素とされるものは、ひどく似たものとして認識されます。当初は別個に認知されていたもの——例えばお蝶さんとグラバー邸——が、イメージ的にびったりだということ縁あるもののように語られる。そしてより「長崎らしい」一つの要素になる、ということも起こってきます。このように同質的であることを要求してくる「長崎」を故郷とすること、旅人として縁づこうとすることは、誰かと似たような経験しか与えてくれない。「長崎」として括られる範疇に、新奇な何か、驚きを伴うような何かを生み出すのは難しい。そのような状況としてみれば、再生産は明らかに、非生産的な、貧しい側面をもっていること

が分かります。

幾つかの文学作品を例にして、「長崎」の豊かさ・貧しさなどのような関わり方があるかを知ることが出来るでしょう。まず最初に、共通理解の可能性が高い「長崎らしさ」を、物語の背景・設定として利用するもの。そういうものはありふれていると思うのですが、その中の一つに原田種夫の小説「竹ん芸」があります。主人公は老いを自覚し始めた男性作家。彼は、エキゾチックな町・長崎の哀しくも艶めかしいムードの中でなら、性的に衰え始めた自分もまた燃え上がることができるんじゃないかと期待して、不倫相手の女性を長崎旅行に誘うわけです。陳腐な、と言われればそれまでなんですが、「長崎」の豊かさを利用する典型ではあるでしょう。

同じく「長崎」の既存の意味内容の豊かさを利用するものとして、原爆について書かれた多くの詩が挙げられると思います。ここでは城尾徳昭の詩「わが恋人・長崎」を典型的な例として紹介します。原爆という未曾有の出来事を語るための

粹組として、第一連から聖母マリア、天草の乱、原城軍旗、といったまさに「長崎」的なモチーフを散りばめています。エキゾチックな情緒を通してしか原爆を語らない詩人たちの姿勢に対しては、山田かんを始めとする厳しい批判が既にあります。もしも「私たち」が、原爆の、あるいは長崎の属性について、それが誰にとつてどういう出来事かということを指し足りないまま均質的な悲劇の色彩に塗り込めて語り、充足してしまうならば、同じ批判の前に立たされることになるでしょう。

その一方で、「長崎」の貧しさと格闘する文学作品も知られていないわけではありません。青来有一の小説「雪の聖地」には、その題名の通り、大雪に包まれたつある爆心地が描かれています。被爆者たちが夏の爆心地で喉の渇きに苦しみながら死んでいったという固定化されたイメージを反転させて、冬の爆心地で金魚のように、あるいはアドバルーンのように跳ねながら雪を食べているというイメージを示しているのです。これは、同質

的な「長崎」に抗う試みといえるのではないのでしょうか。

また村上龍の小説『長崎オランダ村』は、「長崎らしさ」を過剰に演じてみせることに、「長崎」と格闘する一つの手段を見いだしているように見えます。主人公のケンは、久しぶりに帰郷した長崎で、友人のナカムラと会話しながらとにかく食べまくりです。細胞すべてに長崎の食い物が詰まっているという感覚を語りながら、さらに皿うどんを食べるという具合です。これは、「長崎の料理を味わう」という均質な経験となってしまう行為を、その過剰さにおいて、個別的な経験に取り戻している例として見るることができるのではないのでしょうか。作品の後半では、オランダを忠実に再現するというコンセプトを、狂的なまでに徹底しているハウステンボスのことが語られます。実際に煉瓦と煉瓦の間が二ミリ違うことが分かったとき四千万円かけて貼り直したという逸話が知られています。その仕方にもまた、「エキゾチックな長

崎」に単に回収されてしまわない可能性が見いだされているようです。

これら二作品は、「長崎」の同質性に抗って、個別的な経験を獲得しようとすることで、他でもない「私」となる可能性が、決して閉じられているわけではないということを教えてくれるのではないのでしょうか。と同時に、「長崎」のもとに括られるヒト・モノ・コトが異質な相貌をみせる場面を通して、その結びつきが自明でないことを示しているのではないのでしょうか。

さらに三つ目の話題に移って、開港記念日という、長崎の起源と結びついているコトを取り上げてお話しします。その結びつきがやはり自明でないということ、また、その記念日がもたらす「長崎市民」の一体感も人為的に創られたものだったことに注目したいと思います。「私たち」が開港記念日、あるいは「長崎市民」像を自然なものとして受け入れるときに、どんな問題が孕まれてしまうのか。またその問題は、他の場面とどのようにリンクしているかを考えるためです。

長崎商工会議所が長崎市と連携しながら開港記念日を制定しようとし始めたのは、昭和二年頃だったそうです。昭和二年といえば金融恐慌が勃発した年で、第一次大戦の終結以降、貿易額の下落に悩んでいた長崎港は、恐慌によって衰退に拍車がかかる状況だったと思われず。貿易額が全国比一パーセントを既に切っていた港を擁して、あくまで港町としての出発点にこだわるイベントが立ち上げられたわけですから、この記念日の制定には、不況の現状を打破する期待が少なからずこめられていたのでしょう。

記念日が決定されるまでの経緯は『第一回長崎開港記念会記録』(※注・以下『記録』と略記)という小冊子から、かなり具体的に知ることができます。長崎商工会議所は、郷土史に造詣の深い、永山時英、古賀十二郎、福田忠昭、武藤長蔵の四人に依頼して、長崎の出発点となるべき日付の案と史料による裏付けを求めました。回答が出揃ったのは昭和五年の二月。福田と武藤が事前に意見の摺り合わせをして、ほぼ同じ見解を示した結果、三つ

の見解が対立することになりました。

その対立をみるまえに、彼等の共通理解となつている「長崎創建」の流れを大まかに確認しておきたいと思えます。資料に『長崎市制六十五年史』から当時の想像図を転載していますが、その「開港以前」の×印を付けたあたり(※注・岬から北東に約2kmの位置)に、長崎甚左右衛門の城下長崎村がありました。ここに深堀家が攻めてきたため、村を離れた人などが岬の上に要塞を構えて深堀勢を迎え撃ち、長期間かけて勝利したといえます。その場所を基礎として、大村純忠の命による町割がなされたということでした、これが内町と呼ばれる最初の六町のちに豊臣秀吉によつて天領とされたことが知られています。町割の翌年から、ポルトガル船の定期的な入港があったそうです。内町の外延には外町が形成され、この外町は後に一七町まで拡大して内町に取り込まれました。その後、堀によつて境界づけられた外側の土地がまた拓かれて、外町として拡大していく。ごく大まかですが、こんな感じの理解だと思

ます。

さて、各識者の示した見解ですが、古賀の主張する元亀元年三月一六日とは、長崎村から移動してきた人々が岬の上で深堀勢を撃退した日です。福田・武藤が主張した元亀二年四月とは町割りの月で、日は現存史料から分からないので、適当な祭日などを選べばよいという意見でした。永山が主張したのは、豊臣秀吉が内町を天領として代官を命じた天正一六年四月二十七日。この三つの立場の相違は容易に折り合わず、お互いを批判しあう白熱した協議会となつたことが『記録』に残されています。

結局、決定はさらに百人以上の関係者を交えた第二回協議会に持ち越され、昭和五年四月二日に開かれたその協議会で、開港記念日は元亀二年四月二十七日と決まりました。それまでの協議過程については詳細に記してきた『記録』なのですが、その日付が決まった経緯や、どんな史実に基づく日付なのかについては、全く語っていません。「色々の都合からそう定めた」との一文があるだけです。

一方、決定したその日から急ピッチで準備が整えられ、同年同月の二七日にさっそく第一回目の記念日が祝われた様子も、同じ『記録』に収められています。が、記念会の式辞や講演会の内容などみても、日付の根拠が説明されたふしは全く見あたりません。

実は、翌年の第二回記念日に行われた講演会で、記念日選定にたずさわった永山時英自身が、日にちの意味を明かしています。それによると、どうやら、町建てがなされた元亀二年四月と、秀吉が代官を命じた天正一六年四月二七日をツギハギしてできたのが、元亀二年四月二七日ということらしいのです。これによって四人の識者のうち三人分の意見が織り込まれたわけで、そこに妥協点を見出した政治的な決定だったと推察できます。

この日付をめぐる秘話は、そして決定過程で露わになった異論のありようは、言説としてほとんど流通しなかつたようです。永山の口から決定理由が明かされた、そのすぐ二年後に、地元の作家・蒲原春夫による『長崎案内』が刊行される

のですが、彼は「元亀二年四月二七日、長崎が開港されると、長崎の市勢は非常に殷賑を極め…」と、この日付を歴史的叙述のなかに素朴に組み込んでしまっています。「長崎」のごく自然な一要素として、この日付が受容された様が見えます。

この開港記念日ですが、昭和五年の第一回目から、不況のなかで一致団結して努力する「長崎市民」の像を共有することになり、かなり成功したといえそうです。例えば、第一回記念式典の式辞。そこに

結ばれている「長崎市民」像の原型は、記念日選定の際に古賀十二郎が主張していた、元亀元年の光景から取り出されています。ただし、古賀自身は協議会のやりとりのなかで、深堀勢と戦った人々がキリシタンあり他国人ありの多様な集団だったことを肯定していたのですが、この式辞では、彼等は長崎村からの避難民であったという語り口でもって、その出自の均質さが暗示されました。これによって、式辞を聞いているその場の「長崎市民」は、かつて困難に耐えて勝利し、「長崎」の礎石となつた人々を思い描い

て、彼等との連続性、そして同質性を、ひたすら良きものとして味わうことができたと思われまふ。そのような経緯を一体となつてする均質な「長崎市民」の姿は、第一回記念式典の盛況ぶりとして伝えられています。ちなみに四月二七日は、今日の「長崎」のカレンダーにおいても「長崎まつり」として定着しているようです。均質な「長崎市民」像の確認作業は、規模の差こそあれ、毎年繰り返されて現在に至っているわけです。

ここで、問題として整理したいと思えます。均質的であろうとする「長崎市民」が、避難民が基礎となつた「内町」に自分自身との連続性・同質性を求めるとき、避難民内部の多様性、「内町」内部の多様性は排除されています。またさらに、その軋轢のない内町という想像上の対象は、「外町」との不均衡・衝突の記憶を排除したところに成立します。その限りにおいて均質的な「長崎」となるということ。内町と外町の不均衡な関係や衝突については、資料に少しだけ挙げておきました。内町と外町が対等な

く、有用なものとしての均質な「内」が不断に形成されるために、微づけられた者が外へ外へと排除されていった。そこには、「内」と「外」の依存関係や、依存するがゆえの衝突があった。このような観点は、「長崎」の連続性を内町にのみ求める後世の「私たち」の認識が自明ではないこと、また、そのような認識のあり方が無意識的に「外」の存在の排除に荷担するものとなるということに、目を向けさせてくれるのではないかと思います。

また、これと相似形の問題として、既にあるところでもいわれていることでもありますが、「長崎の殉教悲話」「長崎の原爆被災」というような認識・語りは、例えば長崎市民とキリシタンの間、長崎と浦上の間にあった不均衡と衝突の記憶を排除したところに形成されています。そのような認識・語りが自然化されるるとき、例えば第二次大戦中に、長崎市民がキリスト教徒を迫害した記憶や、原爆の爆心地である浦上に対して存在する根深い差別の記憶は、「外」に追いやら

れているのです。

これらの問題を、「長崎」という共通理解を生きる「私たち」の問題としてまとめると次のようになります。一つ目は、「長崎の」というふうにはひと括りにして何かを指したとき、その何かについて指し足りなさを感じないというときの問題です。そのとき私たちは「長崎のヒト・モノ・コト」をそれぞれ別様に分節化して関わろうとする、そういう一人の「私」となる可能性を閉ざしているのではないのでしょうか。

もう一つは、「長崎」という作られた均質さと付き合うとき、必然的に排除の構造に取り込まれてしまう、そのことに無関心であるときの問題です。そのとき私たちは、不可避的に排除する側に身を置くことになるのではないのでしょうか。こういうふうには「長崎」と「私たち」の関係をめぐる考えがきたときには、「九州」という名前前で括られるヒト・モノ・コトを問題化するのとは何のためか、ということが疑問として浮かび上がってきます。一つは、「九州」を「長崎」と同様

に、強い求心力を備えた土地の名前とみなして同じ様に問題化しようとするとき、誰にとつてのどのような場面が対象となるのか、ということ抜きにはできないということ。つまり、「九州」に躓くのはいつたい誰なのか、ということですね。

あるいは、誰かがあえて躓いてみせる——戦略的に「九州」の語りを創出しつつ何かを主張しようとする——のならば、その目的・必要性とは何なのか。ただ作っては壊してみせるという知的遊戯にとどまるのではないか、という危惧も感じます。これは先ほど川口先生がおっしゃったことと重なっていると思います。話が長くなつて済みませんでした。

石川 ありがとうございます。では、数々の小説やエッセーにおいて、地名で人を括ることの暴力性や、自分がそうやって括られることの違和感を言説化してこられた作家の崎山多美さんにお話を伺いたいと思います。私は冒頭の挨拶で、パネリストの発表を引き受けるかたちで

……と申しましたが、そうした課題を無理に負わせるつもりはまったくありませんので、崎山さんがいまお考えになっていることを自由にお話し頂ければと思います。よろしくお願い致します。

崎山 崎山です。この場に座ることができて大変嬉しく思っております。それぞれ四名の方のお話に何か付け加えることができるかといいますが、何もできませんが、私は沖繩で小説を書いているという立場がありまして、その辺から見ると、感ずること、語れることを今回のテーマをめぐってささやかながら発言させてもらいたいと思います。

一月ほど前に石川さんからお話しをもらったときに、私が九州に行つて、福岡に行つて一体何を喋るの、という反応を本音としてしたんですが、何回かお電話で応答しているうちに、たんなる思いつきの企画じゃないんだなということが分かりまして。で、私は今、花田さんの名前を出されるともう、駄目なんですね。分かりました、ということになつてしま

いまして。それで、今回のテーマを設定するに至るいきさつもいろいろ伺いまして、また、私が去年出したエッセイ集の書評を、花田さんに書いて頂いたんですが、そのときの書評の言葉が、いろんなシンポジウムや学会での、花田先生の発言の中に登場してきているということが分かりまして、無責任に、無碍に逃げることは出来ないという気持ちでここに今座っております。

電話を切りまして、どうしよう、何を語ろうと思つたときに、ちょうど二三日前に「あしへい」七号、花田さんの追悼集を送つて頂いて、それを夜の遅い時間にめぐつていて、途中で寝たんですね。その影響だつたと思うのですが、そのとき変なというか、不思議な夢を見たんですね。私は夢を書くということは意識的にはやらないんです、小説の材料としては。エッセイで時々引用したりはしますけれども。その夢を見て、目が覚めたとき、あ、これを話せばいいと言つてくれてるんだ、誰がかつてのはよく分かりませんが、そういうふうな気がば

つとしまして、軽くメモをしたんですね。それで、その夢がどういう夢だったかということをお話することで、お答えにしたいと思います。こんな夢です。

ぼこぼこの丘みたいな道を私と男性が二人で歩いているんです。誰かつてことは、後で少しずつ分かります。ぼこぼこの道なので歩きにくいんですね、私は普通の体調で歩いているんですけど、草もあちこちぼうぼう生えていまして、相手の男性は物凄く体調を壊していまして、ごほごほ咳をしながら、のろのろと、私に離されながら付いてくるんです。それで、登つて行くんです、丘ですからね。難儀しながら。この丘はどこかなというのはだんだん歩いているうちに分かつてきました、ところどころに白いかまぼこ型の倉庫がある。こう言えばお分かりになりますか。基地なんですね、米軍基地の中を歩いてゆくんです。お互いに疲れて来まして、丘の上に行きたいんだけど、手前でへたばつて休むんです。休んでぼおつとしていたら、丘の頂上から、既に登つた人が、男性なんですけど、二人を

見て笑っているんですね、二人がへたばっているのを。見たら、二人の共通の知り合いだった。その男の人の笑い顔、おいでおいでという顔を見まして、ぱっと元気になりまして、ダッシュして丘の頂上まで登っていったんです。すると、嬉しそうに付いていったのはいいんだけど、呼んでおいた本人が、今度は逆の、丘の下の方へぼこーんと降りて行くんです。あれあれっという感じで二人は取り残されて、ぼんやり見ていましたら、彼が、変な窪みみたいな所に降りて行って、また呼ぶんですね。そんな高いところを下を見おろしているとも見えないよ。ここに降りて来ると、とってもおもしろいものが見えるから、見せてあげるからおいでと言うんですね。じゃあといつて二人降りてゆきながら、窪んだところから何かが見えるというのはおかしいよね、高いところの方がよく見えるはずなんだよねと言いながら降りて行ったときに、その人何を見てるかと言いますとね、カメラがセットされてあって、そのカメラは変な管がいっぱい出ているんです、

蛸みたいな。蛸の手は八本しかありませんけれども、もっとたくさん蛸の手が出てまして、彼はそれを覗きながら、とっても楽しそうに、いろんなものが見えるでしょ、楽しいよ楽しいよおいでおいでと言ってくれている。…この辺りでその二人の男性が誰なのかを明かしたいんですけれど、一緒に丘を登って行くのはこのシンポジウムに呼んで下さった石川さんなんです。そしておいでおいでと呼んでくれた人は、もうお分かりだと思いますが、(昨年亡くなられた)花田さんなんです。それで、カメラを代わる代わる見せてくれるんですけど、何が写っているのかといえますとね。たくさん人が並んでいるだけなんです。物凄い人数の、人間です。何かの記念写真のように並んだり崩れたりしているんですけど、花田さんは、その人物たちの顔を、一人だけアップにしてみたり、望遠にしてみたり、部分だけ撮ってみたりして、楽しいだろ、楽しいだろと言っている。あんまり楽しそうに言うものだから、私も楽しくなつてくるんです。ところが、

ちよど楽しくなつてきたところで、花田さんは「もう終わり」とか言って、私達からカメラを取り上げてしまっていて、自分だけ見ちゃうんですね。えー、ずるいずるいと文句を言っているときに、夢が終わったんです。

夢というのは整然としているものではなくて、ごてごてとしている。今しゃべっている夢の話は勿論私が解釈して物語化して話しているわけですが、輪郭があまりにも暗示的で、忘れてはならないと思います、軽くメモをした。棄てられなかつたんです。そのカメラの中の、たくさんの人たちの中で、私が特定できる人物も三名いました。名前だけで顔が分からない人や、顔は浮かんでるけど名前が一致しない人が入っている気もしましたが、はつきりと覚めたときに思い出せる人というのは、ここにいらつしやる創言社の坂口さん、そして後の二人は、私がお会いしたことのある、花田さんの教え子さんたちなんです。これは何かないと、私なりに解釈しちゃうわけですけど。私は福岡に来て、九州に来てこの地域につ

いて何かを語れるか、というとも何も無いんです。でも、何らかの形で語れるものがあるとして、私を福岡とか九州とかと繋いでいる構図というのは、今話した夢の構図ではないかという気がしたんですね。そこで出会った人と、福岡という地域、それを想起することで私に浮かぶ人物との関係が少し拡がっていったという、単純にそういうことだと思う。夢ですからたわいもないこととして、そこからどういう意味が、何が取り出せるかということはたわいのない話なんです、今日のテーマと敢えて引きつけて話をするとすれば、地名で人を括ることの功罪は、みなさんがお話しされた通りでして、良い部分も悪い部分も含めてですね。ですが、マイナスの部分と、利用しちゃえる部分、豊かな部分も貧しい部分もあって、一方的ではないわけです。豊かなものと思われているものも実はひっくり返すと、むしろやばい、貧しいものであったり、マイナスと思ったものも突き詰めて行くと、良い物、その人の生き方によって何かの糧となる場合がある。それを

通路として、今のテーマの問題に引きつけてみます。私たちが日常いろんなことをしながら研究したり先生をしたり本を作ったりサラリーマンをしたりしている、この人生を歩んでゆく中で、地名で括られたり、相手括つたりするという関わり方をするとき、何をどんな風に考えればいいのか、私はここで話をするためのヒントとして、たくさんの人をちょっと凹んだ部分からカメラで覗きながら楽しんだ、あの世界をとりあえず花田ワールドと名付けておきまして、ああいう世界を、考えることが可能なんじゃないかとふと思った。それは地名を排除するというのではなくて、——人間は地名と無関係に生きて行くことは不可能だと私は思います、大事なことだと逆に思います。功罪ありますが、現に私たちは、今福岡にいますし、福岡という土地があったからこうやって集まることができたという気がします。私は沖繩から来て、「沖繩から来ました」と言うことやっぱいいろんなイメージがありますからね、いいものも悪いものもいっしょくたに引き

受けざるを得ないのですが、そこから逃げるわけにはいかない。沖繩から受けた恩恵と、良くないものと、それを引き受けざるを得ない、それが自己の責任であろうがなからうが。つまり土地から逃げることはできないと思うんです。できないけれども、名付けという形で、相手を名付ける、名付けられることから起こる排除の問題がありますね、それが問題なんだと思うんですよ。排除であると同時に、相手を排除することによってこちら側はまもられるわけです。先ほどの長崎の問題でもありましたように、他を排除してゆくことによつてこちらが一体化してゆく。

それを避けるために、簡単に解決はできないと思います、四名の方のお話の中で私が共感できたことを挙げてゆきますと、土屋さんのおっしゃった移動という問題、しかも集団で移動ではなく個人が土地を移動してゆくことから来る、見えてくるもの、他者を想像する、他者を体験する、そこから開かれて来る関係というのが起きてくるということは大抵

だろうと思います。ただし、移動のできない人——私などは移動が出来ないタイプでしてね——は、どうやって移動の体験をするのかというところ。私は小さな移動は頻繁にやります。最近も小さな引越越しをしました。沖繩という括られた地域からかつて出て生活したことはないんです。そういう生き方をせざるをえない者は、どうやって移動の体験をするかということなんです。川口さんの話で思ったのは、台湾で日本語を教えているというときに、日本語という力の関係の中で、あちらの学生が憧れやらなんやら持つて日本人化したいという、日本人化したいというのは本当はおかしいですが、日本語を武器にすることで自分の立場をよくしてゆくというのはよく分かりますよね。現代社会は英語をしゃべれる人としやべれない人の価値の差というものをどこかで意識したりせざるをえない場面がたくさんあります。川口さんが、「取りあえずの日本語」ということをおっしゃった。私は、それだと思っただけです。私も、ウチナーンチュで日本語が下

手なんです、流暢じゃない、しゃべっても書いても。引っかかりながらしゃべらざるをえない日本語体験というものがあ。けれども日本語で表現するしかないんです、他の言語は分かりませんし、他の人には通じない方言だけでしゃべったらやはり困りますよね、分からないから。ですから、とりあえずの日本語、つまり日本語が何者かなのはなくて、とりあえず日本語を勉強しているから、日本語を通して、コミュニケーションしてみようねと。そこから見えてくるもの、あなたは上手、あなたは下手、ちよつと間違つたことを言つたりもする、けれども、違う言語を、——日本人として教育を受けて日本語をしゃべっているということがあつても、必ずしも日本語が全部自分の言語ではありません、いろんな意味で。こういう言い方は少し難しいかもしれな。いんですけれど、私は、体験的に、日本語は自分の言葉じゃないという意識がどこかにあるんですね。でも日本語をしゃべつたり書いたりすることで生きて行く。ざるを得ないとき、とりあえず日本語を

使つて、そこで人の関係を考えてゆく、他者を想像してゆく。その言語を利用するとうか、そういう言語との関わり方、言語というものは一人でしゃべつていて言語にはなりませんから、聞く伝わる相手との関係の中で、他者を想像してゆく、とりあえずの言葉として利用する、そういう意識そのものが、違う相手を理解していくという契機になるような。私は日本語で小説を書いていて、既成の良い言葉とか美しい言葉とか正しい言葉を意識的にずらしていきける表現というものを、試みることでしか、私を考えたり他者を考えたりということはできないのではないかという気がしております、川口さんのおっしゃつた「取りあえずの日本語」ということは、非常に共感を覚えまして。もう一つバーナービーが、どこにも身体感覚が得られないと言つたことは、一見マイナスの要因のような気がしますが逆に、徹底してそういうことを意識することで、或る意味で移動ですよ。それは、移動することで見えてくる他者との触れあいから逆に自分に帰つてくるものがある

るわけで、土着化しえない自分、或る地名に括られない自分、括られたくても括られない自分というものを、徹底的に意識するところから何かが、思想というのは硬い言い方なんです、生き方の指針みたいなものが、人と関わる中で切り結びができるのではないかと思うんです。

畑中さんの長崎のお話、大変おもしろかったです。全く沖繩が描かれていると思います。沖繩ブームとぜんぜん変わらない。沖繩の人が優しいとか明るいとかいうコンセプトと全く同じなんです、そういうイメージを流布することによって何か隠されてゆくわけですよ、隠されているものはいやなものが多い、政治的に不都合なものが多いので、柔らかな部分をイメージ化してゆくことで、一体化して納得することで安心感を得る、沖繩が今持っている問題とほぼ重なるだろうと思つて聞きました。沖繩に当て嵌めてそれをやればまた延々と同様の問題を話すことができると思いますが。

そこで、花田ワールドの話なんです、花田さんはそういうものを全部取り込み

ながら、人をつないでゆこうとしたんだと思います。私は、実は花田さんとはたつた二回しかお会いしていないんです、実物の花田さんとは。だけれども、書かれたものを送つて頂いたり、私の書いたものを読んで頂いたりということの中で、私の投げた言葉を、花田さんは受け取つて頂いているんだなというふうに感じながら、次の作品を書くということがありまして。思い出してみますと、花田さんが私は「3」という数字に興味を持たせると書いてくれたことがあつたんです。これは何かなと思つていて、私はあまり自分の作品を読み返したりしないんですけれども、「3」という数字が何かを三つ目まではやる、一、二、三まではやる、ということを言つて、私二回しかお会いしていないですね花田さんに。

三回目には会はずだったんです。会おうと思えば会えた。会う機会を、亡くなられる前の春に「原点」（沖繩市のコーヒー喫茶まで来られたことがあつて、それを後で聞いたんです。非常にその年の、体調が悪くて閉じこもつていたんです、

私自身が。それで会えなかった。その後の計報だったものですから、私の中では物凄い負債が堪っているんです。今日の話に、敢えて踏ん張つてへたくそながら語ろうと思つたのは、花田さんから受けた負債みたいなものをどうやって返せばいいんだらうというのがずっとありまして、せめてこうして話をさせて頂くことでこれを返せるかなという想いもありました。人が人とつながっているということの中で仕事をしてゆく、仕事というのは或る地域でつながつてゆく、或る一つの場所、

「原点」という場所とか、福岡の九大のこういう教室とかで、つながらざるをえないということがあつて、そうする人間のネットワークみたいなものが、もしかすると、画一的な地域の一括りの妙なイメージ化みたいなものを——全然国の無い人とか、一見土着べつたりの人とかを——ぐちゃぐちゃつなぎながら、個人を想像して思い遣つたり、関係したりすることによってそれぞれの仕事をしてゆく。それしかないんじゃないかと思ひます。何の役にも立たないか

もしもせんけれども、今日私がお話しできるのはこんなものかなというふうに思っています。

石川 花田さんとの思い出を織り込みながらの楽しいお話をありがとうございます。では、引き続き、意見交換に移りたいと思います。パネリストの方向士でもけっこうですし、会場からのご質問でもけっこうですので、ご自由にどうぞ。

●意見交換

坂口 創言社の坂口博です。僕は最初の回のシンポジウムで発表しましたが、そのときは九州「の」思想という形での研究会だという話で、九州の思想というのをずっとその後も宿題みたいに考えてきて、石川さんの朝日の記事のときに、九州「という」思想とニュアンスを変えられてしまつて、二つの違いを自分の中でどう整理すればいいのかなど。九州「の」思想というときにはやはり九州にあったいろんな思想をどう考えるのかというこ

とだと思えます。ですが九州「という」思想と言われたときには、九州について考えるという主旨にスライドしてしまうのではないですか。

石川 実は非常に単純な話で、私はこの共同研究のタイトルを、ずっと「九州の思想」だと信じ込んでいたんです、今回の研究は、九州大学に企画書を提出して、そこから予算を頂いているわけですが、これまで三回行われたシンポジウムでは「九州の思想」というテーマが掲げられていたわけです。ところが、新聞に紹介を書くにあたって、あらためて提出書類を見ましたところ、なんと、タイトルが「九州という思想」になっており、慌てて訂正した次第です。私が書類作成者ではなかったからという事情もあります。これは非常に大きなミスでありまして、みなさんにご迷惑をおかけしたと思つております。

川口 さきほど崎山さんが言つてくださった、「とりあえずの日本語」というこ

とに關してなんですけど、以前、一年生対象の「異文化理解」という授業をしていたんです。日本人の私と台湾人の同僚ともう一人の日本人の同僚と三人で、学生とディスカッションなどしていた。その中で人の名前の問題が出たんです。日本のマスメディアでは、韓国の人だったら今はカタカナ表記、例えばノテウ（盧泰愚）さんとか表記しますよね。ところが中国や台湾の人の名前場合は、リタンホイではなく李登輝と書いてリトウキと読む。最近はまだ変わってきたみたいですが、なぜ韓国の人場合は韓国語的な読み方をして、中国・台湾の人の場合は、なぜ、日本の漢字音で読ませるんだろうねという議論が出ました。僕等も実は歴史的経緯があるなんてことを教えずに、じゃあ聞いてみたらと。一年生でまだ十ヶ月ぐらいの日本語なんですけど、みんなで一先懸命手紙を書いて、某全国紙、まあ読売新聞なんですけど、本社に手紙を送つたみたいですね。僕たちは絶対添削しないという方針で、自分たちで調べて、学習した日本語で手紙を

書いて「あらんと。返事が来たんですね。いわゆる韓国の人の場合はこちらで、それに対して台湾中国の人の場合はこちらだと、説明して頂いたのは大変有り難かったです。学生が書いた手紙を真っ赤に添削して返して、もう少し日本語をお勉強されたらよろしいんじゃないでしょうかと書いてある。学生はそれを見て、僕たちの日本語まだ全然駄目ですね。

解答の内容よりも真っ赤になって返されたことの方を重く受け止めて、僕なんかはそうした返信に腹が立つたんですけど、向こうは親切でそうしてくれたと思うんですが、学生にとつてもその親切さって何なんだろうなということを考える良いきっかけになったと思います。

石川 私が新聞記事に用いた「積み木遊び」という表現について、お二人からご批判を頂きましたので、それに対して若干の弁明をしたと思います。最近土地や地名に関して話題になっていることのひとつに竹島問題がありますが、日本と韓国それぞれの報道を見ますと、両

国とも、自分たちの所有権を主張するたために、あたかもそこに由緒正しき何かがあるかのような言説を駆使します。歴史的に遡ってゆき、昔はこうだったという議論を展開することで自らを正当化しようとします。そして、このときに使われるのが「固有の……」というキーワードです。そうしたものの言い方をして線引きをしたところに派生するのは、何かを固めたり、動かないものにしたたりするという印象です。私は、どちらが正しいかを議論することに興味がありませんので、竹島問題は私の認識を説明するための具体例のひとつに過ぎないのですが、ともかく、ある地名を「固有」化しようとする発想そのものが、身体感的に鬱陶しいと感じてしまうのです。

川口さんのお話のなかに、「九州」という問題の面白さは境界を持たないことにあるという言い方がありましたが、そういう境界の曖昧さといいますが、無意味化する思考といいますが、そういうものが、むしろ大事なのではないかと思うのです。日本では竹島と呼ぶ（島）が、

韓国では別の呼び名で呼ばれ、それぞれが並立していく状態というのは、「地名」で人を括るという発想を考えると、むしろ、有効なんじゃないかという気がしているわけです。国と国との領土問題としては極めて深刻な事態なのかもしれないけど、そもそも、地球上の陸地のすべてがどこかの国に属さなければならぬという考え方自体、疑ってみる余地はあ

るのではないのでしょうか。また、私がここでいっていることは、さきほど話題になった米山リサさんのいう「公共圏」という概念とも重なってくると思います。たとえば、地名とか自分に付け加えられている名前というものが洋服だとすると、そういう洋服を脱げる場所があつていいんじゃないかということ。洋服を脱いでリフレッシュして、またいろんな洋服を着る場所に帰って行く……。

またそれは、私のイメージでは土屋さんがおっしゃった「移動」という概念にも繋がっておりまして、私たちが日常的に背負わされているものをときどき脱い

でみたくなるように、場所を「移動」させる力というのは、意味の「固有」化から逃れるための有効な手段だと思えます。ところが、それが国家の領土権や国民感情というレベルでの議論になると、途端にどちらの立場に立つかということが要請されるようになってしまふ。自分はどういう立場でその地名と関わろうとするのが固定化されてしまふ……。私のいう「積木遊び」というのは、そういう融通のきかなさに対してのアンチ・テーゼという意味合いです。

それから、もう一点、崎山さんのお話の中に人の顔の話がありましたが、以前、花田さんと広島市の平和記念資料館に行ったとき、非常に印象的な光景があったんです。それは、原爆で亡くなった犠牲者の顔写真が無数に出たり消えたりする装置なんです。あの画面を見て花田さんは呆然と立ちつくしているわけです。ここには何十万人死んだとかいう人数で人を測るのではなくて、ひとつひとつの顔があって、その顔がひとつの絵というか模様のように浮かび上がってくることに

よって、言葉では表現できない圧倒的なリアリティを感じさせる仕組みになっていきます。花田さんは、「さすがに国がやることは金がかかっているなあ……」と嫌みをいうと同時に、ジツと何かを堪えているような感じで立ち画面を凝視していました。

それで、私があおのときに感じた印象というのが、本日のテーマである「人を括る」ということの対局にあるものだったんです。崎山さんの話につなげれば、人間ひとりひとりの顔というか、存在性は個別なんだけど、それが地名として括られると、だんだんひとりひとりの顔が見えなくなってきたて、息苦しい社会になってしまふ。だから、私たちは、様々な手段を用いて、ひとりひとりの顔が見えるようにするにはどうしたらいいかを考えなければならぬということです。私がいう積木崩しというのは、別に作っては壊し……という知的ゲームのなかでこの問題を考えていこうということではなくて、積木のピースである人間ひとりひとりの関係性を様々に組み替え、いろいろ

なかたちにしてみる装置というものがあってもいいのではないか、という意味で使ったものです。

長々と弁明してしまいましたが、その点のご理解頂きたいと思えます。

坂口 さっきのことにつながるんですが、僕は「九州の」という括り方が大嫌いで、思想ということは何なのかなというところにシフトしながら考えています。僕は最近、哲学を含めて文学思想に関わる若い人たちの話を聞いていて思うんだけど、考え方のパターンというのがだからだからだからという演繹的な思考方法が今物凄く根強いなという印象がある。こうだからこうだ、こうだからという形でずつと展開して、だからこうでしかありえないという形で自分自身の存在も位置付けてしまふ。いろんな事柄も解釈してしまふ。でも僕の中では思想を学んできたなかで、優れた考え方というのはどっかで切れちゃうんですよ。デカルトにせよキルケゴールにせよマルクスにせよどっかで飛ばなきゃいけない

ところが出てくる。だからだからで理解できる世界じゃない。一般的に思想と捉えるときの考え方というのは、恐らくそういうものがあるんだろうなというのが僕の経験的な勘でもある。「にもかかわらず」みたいなものがどこかにあるんだろうな。にもかかわらずで切れるという形でものを考えていかないと、九州について考えるときにも今後の思考の形として、今日のパターンの中でどっつかでぽーンと蹴飛ばすような視点が欲しいよねと。そうすれば初めて逆に九州について語るといふ事柄も面白くなっていくだろうな。それが総体的な僕の感想であり、僕自身もそういうふうに考えていきたいなと思います。

崎山 私は、福岡とか九州について語るものが何もないと言ってきたのですが、実は一月くらい前にですね、福岡のことを語ったことがあるんです。福岡で仕事をしている女性のジャーナリストですけれど、私に「原点」まで会いに来て下さったとき、もう一人女性ジャーナリストを

加えて、三名でおしゃべりをしたんです。そこで、二つのことを発言したのを今思い出しました。一つは、東京に行きたいとは思わないけど福岡には行きたいよねと。もう一つ、福岡ってどういうところだという話が出て、なんかどうだろうというよね、事件事故が多すぎるよね、福岡の社会部の記者は大変だろうねという話になった。すると、友人の女性ジャーナリストが、私の、福岡のごった煮のような印象を与えるところに引かれるのよねという発言を受けて、彼女が、人間が衣装をまとわないで、裸のまま現れるような感じがすると。私の中の福岡のイメージはそんな印象なのに、私はなんで福岡に行きたいと思うんだろうと。整理してみますと、私はこんなふうに感じたんじゃないかと思うんです。事件とか事故が多いということは、そこに人間的なものがあるということなんだと思うんですよ。

じゃそういうものが、他の地域では出てこないのになぜここでは出てくるの、と問うたとき、今の時代、グローバル化

の時代は制度的にがんじがらめにされて逼塞状態ですね、いろんな組織や大学にしても。その中で、順応しておとなしくなっていく人たちと、無意識に、人間そいうあっちゃいけなけんじゃないの、という形で、——勿論事件を起こす人というのは、社会的に悪の領域に追いやられるわけですよ。悪い奴ですよ、裁かれ、ぶちこまれちゃうわけですよ、でも彼らは、倫理的にかばえることではないけれども、犯罪を犯してしまう人たちの地盤のようなものはあるわけですよ、そうするとそれは一種の制度とか組織とか社会に対する、権力とか抑圧に対する抵抗が無意識のところ、事件となつて側にいる人に向かっていくんじゃないかと。だから私は、肯定的に語ったわけです。事件事故多いから大変なのに行きたいという、自分の中の矛盾した感情の中に、福岡という地域の持つ抵抗の精神を感じたんじゃないかと。そういうところに他者を意識してそこに住んでいたり、意識したりすることから、人間的なるものとは何か、みたいな発想ができないものか。

事件事故を起こさないように規則を作
て行くのではなくて、起こしてしま
う地域の持つているエネルギー、そ
ういうものをもつと人間的なものに
切り替える、なにか肯定的に、事
件が起こるほど肯定的にと言うとい
びつな感じがしますけれども、そ
ういう意識の持つて行き方がど
つかにあつてもいいんじゃないか
と思うんですけど。福岡をイメージ
しようとしたときに、自分がつい
発言してしまつたことを引き取
つて敢えて解釈してみました。

マリオ 私は九州大学大学院比較社会
化学府のマリオ・ロベズと申しま
す。私は「よそ者」ですが、出身地
はイギリスのロンドン、父親はス
ペイン人、両国で育てられて、二
つのふるさとを持つていると言
えるかもしれません。それで、九
州という思想があるかどうか私に
は分からないのですが、例えばロ
ンドンに関しては、一つの思想は
存在していない、ですが九州に
来てからの経験で言えば、

一つのつながりはあると思う。それ
は九州の人の優しさです。東京や
東北に比べて、九州では、人の優
しさが私の心に響いてきます。特
に二年間長崎市役所に勤めたとき
には、言葉が通じない恐れがあ
つたのですが、長崎弁を身につけ、
それを乗り越えることができた。井
の中の蛙大海を知らず、という諺
がありますが、私は大海を越えた
人として非常に広い体験ができた。
九州という思想を作る権利がある
かというところが、もしつながり
があるとすれば、それは人の心の中
に響いている優しさだと思います。

川口 プロジェクトの予算の消化の仕
方について少し提案したいと思
います（笑）。石川さんの新聞記事
に、「九州と東アジア地域、韓国
中国台湾などはこれまでどのよ
うに交流し、今後どのような関
係を持ちうるかを考えること」と
あるのだから、この「九州という
思想」のプロジェクトで毎回話し
合われたことや、そこに出席した
人の感想などを、インターネット
で全部公開すべきだと思う。比

較社会文化学府の人材を使えば、
英語、日本語、韓国語、中国語、
タイ語、ベトナム語等々に訳す
ことができるはず。今の時代だか
らどこかで誰かが必ず見ている
と私は思います。花田さんのホ
ームページを私の学生が見つけ
て、「楢円の思考」というエッセ
イを読んで、レポートを書いてく
るというようなこともあります。
「九州という思想」も、日本語
だけでやるのもいいけど、東ア
ジアと関係を作るというのであ
れば、いろいろな言語で発信し
てゆくべきだと。そして留学生
に翻訳代を出せば、予算も消化
できるかなと思います。

土屋 先ほど、「九州という思想」
ではなくて最初は「九州の思想」
だったということ聞いてちよつと
愕然としたんですけど（笑）。「
九州の思想」であれば全く別の
ことをしたと思うんですね。平
戸が生んだ思想家・歴史学者、
菅沼貞風について考えたかなと
いうこともあります。しかし、「
九州という思想」という枠に沿
つて言いますと、なぜ「九州と

いう思想」について考えなければいけないのかということ考えたときに、一方において、それが存在しないということも半分は考えなければいけないだろうなど。それで功罪ということで考えたわけですが、やはり「九州という思想」と言ったときに、現実問題として東北という思想、既存の「東北学」がかなり意識されているだろう、それが念頭にあるだろうということとは容易に想像がついてしまわうわけです。だからといって二番煎じが悪いか対抗しているだけじゃないかななどと言うつもりは全くないのですが、私は「取りあえずの日本語」に対して「取りあえずの地名」ということを思っています、——地名について、固有名について、あるいは名指すということについて権力性、抑圧関係を指摘するのは簡単なことですね。しかし地名というものを、先ほどから言っているように或る程度引き受けて、コミュニケーションツールとして、個人個人が関わった、ゆかりのあった地名、それは勿論、かけがえのないいろんな人たちの思い出や記憶と結び

ついた形での地名というものがそれぞれあるわけで、それは一つのコミュニケーションのツールになる、手段になるということを否定すべきではないと思う。例えば飲み会などでもお国はどこですか、ということから始まるということもありますし、血液型と一緒に、馬鹿馬鹿しいと思いつつも、やはりそこからいろいろなことが始まるということもある。かけがえない人間の記憶と地名はどうしても結びつく。例えば、昨年からは石川さんを通じて、九州大学に二回来る機会を与えて頂いてとても感謝しているのですが、そのお陰で今回博多で地震があった時に、非常にすぐに心を反応させることができた。そういった形で人と人の結びつきがいろんな地名と結びついた形で内面化されていく中で、崎山さんの言葉で言うならば他者を想像する範囲が自分の中で拡がればいいと思いますし、川口さんと知り合えた御陰で何かあった時には（笑）、前より半歩素早く関心を持つことができるだろう、ということの関積み重ねですね。それで、東北学との関

係に戻りますが、東北学というものが現にあるわけですから、「九州という思想」プロジェクトを立ち上げたときに、そことのコミュニケーション、別な所の地名を掲げてやっている人々との接触というかシンポジウムというか、プロジェクトそのものを移動させる試みがあっても面白いんじゃないかなと思います。

挽地 日本学術振興会の挽地康彦と申します。たとえば、コミュニケーションをする相手を地名を通じて理解したいということとはよくあると思いますが、それは相手を所有したいという、そういう問題として考えることもできると思います。つまり、所有する技術として相手を地名で括って理解しようとする。所属先はどこですか、みたいな会話もこれとよく似ています。ですが所属先と違い、地名に関しては、定住している人も移動する人も、何らかの形で或る土地は通過しているわけで、つまり地名というのは非常に強固な網の目の中で機能している。それは構造主義的な認識のされ方であり、そ

のときの地名は記号でしかない。ですから、土屋先生は肯定的な地名の使い方について言われましたが、そういう記号による括り方をされたくないという立場もあると思います。そこで、地名で括られることを避けるためにどうすればいいのかというと、移動も魅力的かもしれないが、例えば九州という名付け方を、九州というのは数字で変数ですから別の数字に置き換えるなど、土地の名前を変えていくようなことを個々の会話の中で実践するのもいいと思います。

朝稲 私は九州大学大学院比較社会文化学府の朝稲香子と申します。崎山さんには是非伺いたいのですが、凄くナチュラルに使ってらしたので多分普通に会話の中で使う言い回しだと思んですが、沖縄から、福岡に行くという意味合いで「九州に行く」という言い方をされていたのが物凄く新鮮で、イギリス人がフランスやドイツに行くときに、僕ヨーロッパに行くんだ、というのを聞いたときや、日本人が、タイや韓国に行くときに、来週

アジアに行くんだというのを聞いたりとたときと同じ違和感を感じるのですがいかがでしょうか。

崎山 多分これは習慣化された意識だと思っんですよ。私、西表という島に居まして、次の少し大きな都市の、石垣島に行くときに、「四箇」に行くと言っんですね。「四箇」っていうのは、その中心城市なんですね。また、沖縄本島に行くときに、那覇に行くとは言わない。沖縄に行くと言っんですね、西表から那覇に出るときに。だから、具体的には福岡に行くと言っばいいのですが、——ですかこれは、悪い例なんですね、違和感と言っただ方が正しい。差別の構造の端の方にいた者の発言として、なんとなく自然に聞きとられたのはやばいんですね。一つの序列の中で、福岡⇨九州という発想が私の中に多分あって、そこを突かれました今。

朝稲 宮崎とか鹿児島に行くときも、九州に行くと言われますか。

崎山 無意識にそういう表現が出てくる可能性はありますね。ただ私は福岡しか知らないんで、沖縄から県外に出る、しかも九州というところに行くということと福岡に行くということがつながっちゃって、ただそのつながりから私が意識しているのは具体的には人に会いに行くというね。石川さんに会いに行くとか。という意味で福岡とか九州といっちゃうわけですけど、ただ言葉として出てくるときにはそんなふうになっちゃうんです。

石川 今日の午前中にあつた博士論文公開審査の場で、琉球大学の新城郁夫氏と川口さんの間で道州制の話題がチラッと出まして、私が、「九州がひとつの州になったときに、沖縄の方たちはどう感じるんですか」と聞きましたところ、物凄い違和感があるという返答でした。もちろん、新城氏の言葉が沖縄のみなさんを代表しているわけではありませんが、特に沖縄の場合は、歴史的にも文化的にも「九州」という枠組みに取り込まれるこ

とに對しての強烈な警戒感があるようですね。もちろん、そうした感情は理解できませんし、沖繩を「九州」の一部に組み込むことには相当の無理があると思うんですが、注目したいのは、そうした意識がひとりひとりの意識レベルでいかに内面化されているかということなんです。その点について、崎山さんはどのようなご意見をお持ちでしょうか。

崎山 それは個人の意識の問題だと思いません。私は、意識の中で或る程度、自分とつながっているものがあると、自分で信じちゃって、つないじゃうわけね。でもそうじゃない、括られたくないという意識はよく分かるんです。抵抗としてあつていいし、あるべきだと思いますが、でもそれはやはり、表現として具合はよくないと思います、今指摘されたようにね。反省してます(笑)。

例えば、沖繩の人ですね、と言われたときに、ここ数年は大変便利なんですよ、説明しなくても分かったような顔を、相手にされるんですね。違うけどな、と思

つてもまあいいや、便利だからいいやということになるんですが、違和感を溜め込んだまま面倒くさいやと通しちゃう。「沖繩から来た私」みたいな意識がある。沖繩が持っている負債を背負わざるをえない場面があったときには、過剰に意識していいと思うこともあるんです、はい私沖繩ですと。こんなふうにして、いろんな目にあつてきています、厭なものいっぱいありますと。沖繩の人は優しいとか、暖かいとか、沖繩の女性は男が働かなくても女の人がどんどん働いて食べさせるとか、そういうことを何となく了解している人たちがいるんです、事実として。違うんだよ、という部分と、現実にはそれはあるわけですね。それを誤魔化す、負の部分をごまかしてゆくと、う認識の構造があるんで、意識的に拒否するところは拒否したい。けれども、負債として、個人の問題じゃない、地域の問題として、相手から投げられたときには、日本人とかにやられたときに、意識せざるをえない。両方、意識としては持つべきじゃないかと思うことはあります。

今、東北学というものを意識して、九州学みたいなことがもしね、あるとするときの善し悪しいいいますか、実は沖繩には沖繩学というものがあるように語られるんですが、私はやっぱり危険だと思ふんですよ。いったん立ち上げてしまったときの、それが違うんだと言つたときの、枠を外すときのエネルギーは物凄く時間がかかると思うんですよ。とりあえず便利なものという形で、九州学を立ち上げるといふことは起こりうるんですけど、イメージ化されてしまったときに、具体的に言いますと、沖繩学なんて言つてもね、本音言いますと、物凄く貧しいんですね。え、学？つて感じで。沖繩学つて何？つて。伊波普猷が居て、とか語られても、その枠のなかで、なんとかかの学者が伊波普猷賞をもらうとかいう構造は、非常に壁を作つちゃつて、外部を排除しちゃうんです、どうしても。そこで問題なのは、質が問われないんですね。沖繩の芸能とか言つたときに、沖繩は芸能が盛んで豊かで、沖繩学っていうのも

あつてというふうに、いったんイメージが作られたときに、利用しちゃう人いっぱい居るんですよ。で困っちゃうんです。その政治的な経済的な力というのは、やはり再生産されてゆく。歯車が転がるみたいに逃れられずにやっつてゆく現状というのが今現在沖繩にあるので、九州学なんてものを、もし、立ち上げようという計画があるとすれば、ちよつと待てと。待てというエネルギーの方に精力を使った方が、知的な活動としては良いんじゃないかというふうに個人的には思います。沖繩学、東北学というものが念頭にあつて「九州という思想」というものがイメージされているのだとすれば、そう思います。

坂口 崎山さんの話を聞いてて思ったのが、やはり東北学というのも、真壁仁つてのを、非常に今積極的に取り上げる形で検証やつている、東北学の大きな柱にしているようですが、「九州という思想」「九州の思想」どちらでもいいんですけど、僕はやはり思想というのは最終的には一

人に還元される事柄だと思つて、一人のいろんな在りようというものをきちんと捉えていかにすることは、——それで總体的に最終的に「九州という思想」みたいな括り方ができるんだつたらいいんだけど、最初から枠はめっちゃうというのは僕物凄くアレルギーがあつて、逆に言えば僕なんかが具体的に思い浮かべる思想というのは、やはり一人で世界にどう向き合つているかということが、きちんとしていけるといふことだと思いません。その場合、九州という地域性なんて殆ど無意味な感じがしているんですよ。一人一人名前挙げていけばきりがないから挙げないけど、水俣の、とか沖繩の、という形で語られてきたとしても、そこで取り上げられている思想性のある人々つてのは、やつぱり一人一人で立つている、だから逆にいえばどこに置いたつて、その場で世界と向き合う形を形作つていける人たちだよねと。だから僕は地域性つてのは、後に付随する事柄ではない、先行する事柄じゃない、先行するのは、一人一人の世界との向き合い方

だよねという所に、重点を置いて考えている。何かに凭れてそこでものを考えているつていうのは、正直言つて面白くないよねと、もう思想というジャンルには入れたくないよねと、そんな形で今、与えられた課題の範疇で、考えているところですよ。

石川 やつと議論がかみ合つてきた印象があるのですが、残念ながら、予定していた時間を大幅に超過しておりますので、本日のシンポジウムはここで終了させて頂きます。崎山さん、パネリストのみなさま、そしてご来場頂いたみなさま、どうも有難うございました。

石川巧 (九州大学)

川口隆行 (台湾東海大学)

崎山多美 (作家)

土屋忍 (武蔵野大学)

畑中佳恵 (西南学院大学)

バーナビー・ブレイデン

(立命館アジア太平洋大学)

記録者 廣瀬裕作 (筑紫女学園短期大学)

